

弟から学んだこと

福井市 灯明寺中学校 二年 佐藤 凜

私には四歳の弟がいます。弟はADHDという発達障害を持っています。ADHDの人は多動性、衝動性、不注意といった症状があるそうです。弟は集団行動が苦手で、幼稚園の発表会ではお遊戯をすることなく終わってしまいました。

弟が幼稚園の友達をたたいてしまったことがありました。私は帰ってきた弟に、

「なんでたたいたりしたの？いけないことだって分かってなかったの？」

と怒ってしまいました。そう言うと母は、

「そのどうしてが分からないから説明してあげる必要があるの。」

と静かに言いました。私はそのときから自分を基準に「分かる」「分からない」を決めつけないように心がけるようになりました。弟は幼いころの私と比べられることがありました。私は幼いころ、大人の言うことを聞く、いわゆる「良い子」だったようです。あるとき弟がふざけていると、

「凜ちゃん（私）はあんなに良い子だったのに。りくくん（弟）は…」

と言われました。母は悲しそうでした。私はとても腹が立ちました。弟が良い子ではない「悪い子」と言われたような気がしたからです。弟の一部分しか見ていないのに、悪い子といわれたことが嫌でした。自分の価値観で人を批判するのはすごく悲しくて、そして決してしてはならないことだと思いました。

弟はよく友達をたたいてしまっていたので先生に注意をされてきました。そのたびに母が相手の保護者に謝っていました。

「子ども同士のけんかなので大丈夫ですよ。」
と言ってくくださる人もいれば、冷たい目で見てくる人もいたようです。私は母が「子どもに躰をしていない親」だと思われるのが嫌です。私の母はそうではないと思うからです。母は、弟の発達障害を疑い始めたころ、考えすぎだ、神経質すぎる、と言われたようです。でも私はそうは思いませんでした。なぜなら早く気づけたからこそ正しい支援が早く始められたと思うからです。また、子どもの発達障害に目を背けてしまう親もいるようです。このようなことから、私の母は弟に一番に向き合っているといます。大切なのは障害があるかどうかではなく、

弟がより楽しくこの社会で生きていけるよう、まわりが理解し、サポートしていくことだと思います。

私は弟がいなかったら発達障害を持っている人を白い目で見ていたかもしれません。発達障害について何も知らなかったころ、母に弟がADHDであることを知らされました。弟がみんなと違う、普通でないことが受け入れられませんでした。ですが今は、共通する普通は存在しないと思っています。一人一人違う性格や個性を持っているので、同じ人間はいません。同じ人間はいないのに普通を定めるのは不可能だと思います。自分の中の普通を人に押しつけるのはよくないと思った経験がいくつかあります。私のクラスメイトで特別支援学級に行っている人がいます。その人が漢字の読みを間違えてしまったときに、

「あいつは特別支援学級に行っているから分からないんだな。」

と笑っている人がいました。その笑った人にとって、普通学級に行っていることが普通なのでしょう。ですが、自分の中の普通と少し違う人を馬鹿にするのは間違っていると思います。自分の中の普通を基準に考えてしまったり、相手のことを理解するのは難しくなると思います。誰もが幸せに暮せる社会の実現は困難ですが、そんな社

会に近づくことは可能だと思います。必要なのは、自分の価値観や普通の基準を人に押しつけず、相手を認めることだと思います。

発達障害は決して悪いことではないです。アインシュタインやニュートンは発達障害だったといわれています。発達障害を持つ人は、一つの物事に熱中して取り組む傾向があるようです。私の弟も今、ビートボックスに夢中になっています。誰かに強制してやらされているわけではなく、自分から、「楽しい」を見つけ出したのです。私は現状に満足して新たな「好き」や「楽しい」を探そうとしないことがよくあります。ですが弟は、自分で幸せをつかむ他の人にはない能力を持っています。弟は少しずつ成長していると日々感じます。友達をたたくことはなくなりましたし、絵本を最後まで集中して聞けるようになりました。この成長は母が弟に向き合い、理解しているからだと思います。物事は白か黒かだけでなく、グレーも存在することを弟から学びました。今の社会は正しいか正しくないかで判断することが多いと感じます。ですが、本当に大切なことは、様々な視点から物事を見るという姿勢だと思います。これから弟は大きな壁にぶつかることもあるかもしれませんが、それでも、弟から学んだことを忘れず、向き合っていきたいと思っています。